Nagoya City University

SRAを利用した多読の授業

宮　田　　学

1．人間科学科の英語カリキュラムと「英語リフレッシュ」

人文社会学部人間科学科における英語教育の全体像に関しては、すでに宮田（1998）や宮田（1999）において紹介した（注１）。その後、名古屋市立大学では、医学部・薬学部・経済学部の旧教養部時代のカリキュラムおよび人文社会学部・芸術工学部の新しいカリキュラムを見直して、それらを統合した５学部共通の教養教育カリキュラムを策定し、2000（平成12）年度より実施した。2003（平成15）年度からは、さらに看護学部を加えた６学部共通の教養教育カリキュラムへと移行することになった。

人文社会学部では、教養教育科目の「外国語（英語）」に関してはカリキュラム上の変更はなく、唯一の通年科目であった「応用英語」（３年生用選択科目：２単位）を分割して、他の外国語科目と同様に半期（１単位）の「応用英語Ⅰ」と「応用英語Ⅱ」にするという手直しを行っただけであった。したがって、人間科学科の英語カリキュラムは学部開設（1996年４月）以来、同一の内容となっている。ただし、担当者の交替や移動があり、宮田の場合、２年生向けの「総合英語」について、「総合英語Ⅰ」（リスニング分野）および「総合英語Ⅲ」（ライティング分野）から、「総合英語Ⅱ」（リーディング分野）および「総合英語Ⅳ」（カレント・トピックス）へと担当が変更となった。

本稿では、５学部共通カリキュラムが実施された2000年度より３年間にわたり「英語リフレッシュⅡ」で行ってきた、多読の授業について詳しく報告する。「英語リフレッシュ」は、日本語の不必要な介入を避け、英文レベルでの表現力（リフレッシュⅠ：１年前期）と理解力（リフレッシュⅡ：１年後期）を増すことを目指す科目であった。「英語リフレッシュⅠ」の授業展開例は、宮田（1998）にて詳しく報告した。また、ここで紹介したジャーナル・ライティングの理論的背景については、宮田編（2002）をご覧いただきたい（注２）。

「英語リフレッシュⅡ」の授業としては、宮田（1999）の第３節にて述べたように、知らない単語が出てくるとすぐに辞書で調べる、すべて日本語に訳さないとわからない、訳すことはできても筆者の真意を理解できていない、英語で書かれた物語を楽しむ余裕がない、そんな学生をなくすことができれば成功である。それを実現しようと宮田が取り組んだ授業は、つぎの３つのタイプに分けられる。

A）語彙レベルが学生たちの実態に合っており、内容理解を測るための適切な練習問題が付いている教材を用いて、日本語の介入を低く抑えた授業を行う。

B）１つの物語を鑑賞するための補助教材を作成し、それを活用した読解の授業を行う。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

C）各自の学力レベルとペースに合わせて速読を行う基礎訓練をしたり、学生自身が選んだ短編小説などを多読する（個別学習の形態をとる）。

97および99年度にAタイプ、96および98年度にBタイプの授業を実施し、宮田（1999）においてBタイプの授業展開について報告した。2000年度以降は、リーディングの教材キット“SRA Reading Laboratory”を用いて、Cタイプの授業に取り組んだのである。

2．“SRA Reading Laboratory”とは？

SRAは、アメリカ合衆国にあるScience Research Associatesという出版社の頭文字をとったものである。“SRA Reading Laboratory”（以下、SRAと記す）は、発案者のパーカー博士（Dr. Don H. Parker）はじめ、多くの共同研究者によって開発された、小～中学生向けの教材キットである。最初のキットは、1957年に出版されている。同僚の外国人教師の中には、このキットによる学習を小学校時代に体験した人もいる。

その最大の特長は、学習者の読解力レベルに応じてリーディングの個別学習ができるように、難易度の異なる10種類前後の短い読み物と練習問題、語彙学習、聞き取り練習などの教材を１つの箱に収めているところにある。教師用のていねいな指導書（Teacher's Handbook）も付いている。

SRAのキットは、読み物教材のReadabilityを主たる目安にして、１aから３bまで多数用意されている。宮田は前任校（名古屋市立保育短期大学：1997年３月閉学）において、はじめてSRAの２cのキットを使用した。これは、アメリカの小学校のGrade４～６向きのもので、Readabilityが3.0から9.0までの読み物教材をカバーしている。

このキットには、“Rate Builder”および“Power Builder”のカード教材が、AquaからTanまで10の異なるレベルに色分けされ、それぞれに15枚ずつ（したがって、合計150枚ずつ）用意されている。“Rate Builder”は制限時間内に要領よく英文を読み取るための教材で、短めの英文と内容把握のためのテスト問題とで構成されている。“Power Builder”はキットの主役とも言える教材で、時間制限はなく、学習者が自分に合ったペースで自主的に取り組む。やや長めの英文と内容把握のための問題および語彙の問題で構成されている。この“Power Builder”には、問題を間違えた場合に文法・構文・語彙などを補充学習するための“Skills Development Lesson”が、150枚（237 lessons）用意されている。

キットが収められている箱を開けると、これらの教材のほか、“Rate Builder”の解答冊子が30冊、“Power Builder”および“Skills Development Lesson”の解答カード（それぞれの教材毎に１枚の解答カードがあるので、各150枚）、学習の様子を記録するための“Student Record Book”30冊、リスニング演習のためのカセットテープ４本、教師用のハンドブック１冊、オリエンテーション用のカセットテープ１本、さらに色鉛筆14色セットが入っている。教師はこの箱を教室に持ち込んで、学習者に各自の“Student Record Book”とその日の教材を選ばせて、学習させる。授

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

業が終了すると、学習者は自分が使った教材や解答冊子などをこの箱に戻すことになる。

3．授業の基本設計

SRAの２cのキットを用いた多読の授業を行った経験に基づき、英文を素早く読み取る力を養成することを目的として、人間科学科の学生たちを対象にした授業を構想した。まず、学生たちの学力レベルを考慮して、２cよりも１～２段階レベルが高い３aと３bのキットを用意した。キットの内容は２cとよく似ているが、宮田が入手したものには、いずれのキットにもカセットテープは入っていなかった。３aのキットには、“Rate Builder” 150枚、“Power Builder” 100枚、“Skills Development Lesson” 150枚（225 lessons）が収められていた。一方、３bのキットには、“Rate Builder” 144枚、“Power Builder” 99枚が収められていたが、“Skills Development Lesson” は入っていなかった。その代わりに、“The Literature Strand” と名づけられた短編の名作集（25冊）が付属していた。

「英語リフレッシュ」は学生を２グループに分けているため、１クラスの人数は25～27名ほどとなる。１セットのキットを使うのにほぼ適した人数である。2000年度は３a、01年度は３bを使用した。02年度は３aを基本にしながら、３bの教材を一部加えてみた。授業内容は年度による変化はほとんどなく、［表１］に示したように、後期の授業が始まってからオリエンテーションのための授業を２回行ったあと、多読の演習を10回ほど行い、冬休みから休み明けに最終課題に取り組んだ。

［表１］授業経過

回	授　業　内　容
1	後期の学習について、レベル分けテスト、前期英作文レポート返却
2	ラジオドラマ-１、レベルの決定、学習の進め方と記録の方法
3	ラジオドラマ-２、多読演習-１
4	ラジオドラマ-３、多読演習-２
5	ラジオドラマ-４、多読演習-３
6	ラジオドラマ-５、多読演習-４
7	ラジオドラマ-６、多読演習-５
8	ラジオドラマ-７、多読演習-６、課題図書の選択-１
9	ラジオドラマ-８、多読演習-７、課題図書の選択-２
10	ラジオドラマ-９、多読演習-８、課題図書の選択-３
11	ラジオドラマ-10、多読演習-９、課題図書の選択-４
12	ラジオドラマ-11、多読演習-10、課題図書の決定
13	ラジオドラマ-12、課題図書の学習、授業アンケート

授業は、ほぼ以下のような手順で進めた。多読演習の際の詳しい手順は、学生たちに配布したプリントを［資料１］に示しておくので、見ていただきたい。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

1）テープを用いた聞き取り練習（クラス全体で）

2）“Rate Builder”による速読演習（クラス全体で）

自分の色の“Rate Builder”を２枚選び、制限時間内に読み取り、答え合わせを行う。

3）“Power Builder”による読解演習（個人で）

自分の色の“Power Builder”を１枚選び、自分のペースで読み進み、答え合わせを行う。

１つの教材が終わるたびに次の教材を選び、同じように取り組む。

4）必要に応じて、教師に質問／相談（個人で）

日本語の世界から英語の世界への切り替えがスムーズに運ぶように、授業を物語の聞き取りから始めることにした。聞き取りは、話し手（この場合はテープ）のスピードについていかなくてはならないので、“Rate Builder”の教材を決められた時間内に読み取るための準備にもなると考えた。

聞き取り教材は、SRAとはまったく別の、ラジオドラマ風のミステリーを選んで用いた。2000年度は“Moon of India”、01年度は“Missing Person”、02年度は“New York Detective Story”のテープを利用した（注３）。いずれも、宮田が真偽問題あるいは多肢選択問題を作って小テスト形式で実施し、答え合わせをしたあとで、スクリプトを配布した。

“Rate Builder”および“Power Builder”を用いて行った学習内容と結果（日時、教材番号、解答、採点結果、正答率など）は、すべて各自で“Student Record Book”に記録し、授業終了時に提出する。01年度の“Student Record Book”より、ある学生の“Power Builder”の解答用紙を［資料２］に、グラフを［資料３］に示しておいたので、参照していただきたい。教師はこれらの記録を点検して、学生たちの学習の様子をチェックして、適切なアドバイスを行うことになる。

なお、学生たちが“Power Builder”の学習を行っている間に、バロック音楽を小さな音で流した。これは、バロック音楽が人間の右脳を刺激し、言語活動をつかさどる左脳を活性化するという「サジェストピディア」の考え方をヒントに取り入れたものであるが、静寂が支配する教室は、ちょっとした物音や隣の教室からの音などが気になって、かえって落ち着かないということを配慮したものでもある。

４．実施上の問題点と工夫

（１）キットの何を利用するか

SRAは、もともと英語を母語とする小～中学生向きに開発された教材キットであるので、大学生が使う場合には、いくつかの変更を加えて利用することになる。

例えば、“Power Builder”には、本文の後に、理解度を試す問題の他に、語彙に関わる問題が収められている。語彙の問題は、発音と綴り字の関係、接頭語や接尾語の学習など、大

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

学生にとって不必要なものも見かけられる。したがって、「英語リフレッシュⅡ」のクラスでは、これらの問題すべてに取り組むのではなく、必要最低限の問題だけとした。上述のように、この“Power Builder”には補充学習用の“Skills Development Lesson”が用意されているが、これも取り組まないこととした。

また、キットには色鉛筆が1セット付いている。これは、読解の各レベルに色が対応しており、“Student Record Book”に結果を記録する時に、それと同じ色の鉛筆を用いて記録するためのものである。勉強が進んで色が変わると、ある種の動機づけになるなど、楽しく学習するための工夫と思われるが、大学生には不必要なものである。したがって、「英語リフレッシュⅡ」のクラスでは、キットから色鉛筆を除いておいた。

一方、キットに付属している“Student Record Book”は、そのほとんどすべてが解答用紙や記録用紙となっている。半期の授業を終了した時点で、3分の2以上のページが何も記入しないまま残ってしまう。“Student Record Book”には個人の記録が残るため、年度毎に新しい“Student Record Book”を購入しなくてはならない。そこで、3年目の02年度には、この問題を解消するために、宮田が記録用紙を自作し、必要となる量を綴じて、人数分の“Student Record Book”を用意した。

（2）オリエンテーションと時間の割り振り

付属の教師用マニュアルにしたがうと、キットを学習者が自主的に使いこなせるように、かなりの時間をかけてきめ細かくオリエンテーションを実施することになっている。大学生レベルでは、オリエンテーションにそれほど時間をかける必要はない。

「英語リフレッシュⅡ」の授業は週1コマ（90分）、半期で13～14コマ程度の時間となる。後期に開講されるので、できれば冬休み前には多読の演習を終えたい。そこでオリエンテーションに2コマをさき、3コマ目からは、上記のような手順でキットを用いた自主学習を開始できるように計画した。

“Rate Builder”に取り組む制限時間は、3分と決められている。ところが、実際に行ってみると、3分では時間不足となる学生が多いことがわかった。そこで、「英語リフレッシュⅡ」のクラスでは、4分とした。これでもまだ時間不足となる学生が数人見られたので、こうした学生に対しては、“Rate Builder”のみレベルを落として取り組むように指示を与えた。

“Power Builder”の問題については、前述のように、必要最小限とした。文脈把握にかかわる語義の問題までとし、それ以降はすべてカットしたため、“Power Builder”に取り組む時間は、多くても30分程度となった。

（3）どのようにレベルを決めるか

SRAを用いて効果的な学習を進めるための最大の鍵は、個々の学生の学力レベルに合った

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

教材に取り組ませることにある。レベルが高過ぎてもいけないし、低過ぎても困るのである。そのために、最初の授業でレベル判定テストを実施する。

これは、“Student Record Book”に収められている“Starting Level Guide”を用いる。ここに比較的短い２つの文章が用意されており、制限時間を設けて取り組ませる。教師用マニュアルに、このテストの得点別にどの色のレベルで学習させたらよいかが一覧表になっているので、最初はこれにしたがってレベルを決める。

ただし、実際にこの判定テストを実施してみると、確かに学生たちの読解力には差があるものの、５～６種類のレベルに集中する。１つのレベルに取り組むことができる学生数は、教材の総点数と、毎時間取り組む教材の数から計算して、６名あたりが限度である。そこで、単に得点（＝正解数）だけではなく、制限時間内にいくつ解答できたか、２つの判定テストの差はどれくらいか、などを考慮して人数を調整することになる。

もちろん、たった１回の判定テストで正確にレベルを測るのは困難である。したがって、実際に教材に取り組ませながら、適切なレベルであるかどうかを見極め、必要に応じてレベルを変更するように指示しなくてはならない。

そのための手掛かりになるのが、正答率と所要時間である。授業の最後に“Student Record Book”を集めるのは、そのためである。記録を見ながら、レベルに合っているかどうかをチェックするのである。正答率が５割を切るようでは、問題である。それが２～３回続いたら、レベルを下げる。逆に、正答率が９割前後をコンスタントに維持しているような場合は、レベルを上げる。上に述べたように、“Rate Builder”のみレベルを下げたほうがよいという判断をすることもある。

多読演習を２～３回行った時点で、レベル変更が必要な学生にその旨指示を出す。それでもまだレベルが合わない学生には、再度指示を出すことになる。02年度の記録を見てみると、４回目の授業が終わった時点でレベル変更した学生が９名、６回目の授業が終わった時点で変更した学生が４名（内１名は再度の変更）であった。

５．学習の成果を生かす

冬休みを迎える前に、多読演習の成果を応用する目的で、自分が読みたいと思う読み物を１冊選んで、自分の立てた計画にしたがって読み進み、その結果をレポート（感想文とあらすじを合わせて５枚程度）にまとめるという課題を与えた。学生たちには、以下の要領で進めるようにアドバイスした。

１）まず、ざっと通読し、知らない表現、忘れた語句などがあっても立ち止まらずに、授業で取り組んだ“Rate Builder”や“Power Builder”の要領で、話の内容をたどることに心がける。「どうしても」という場合にのみ、注を見たり、辞書を引いたりして意味を確認する。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

2）もう一度じっくりと、好きなだけ時間をかけて鑑賞する。必要に応じてメモを取り、感想文やあらすじを書くための準備をする。わからない箇所について調べる。

3）感想文を日本語で、Ｂ５判の400字詰原稿用紙（横書き）１～２枚程度にまとめる。

4）あらすじを英語で、Ｂ５判のレポート用紙３～４枚程度にまとめる。英文は１行おきに書く。あらすじ→感想文の順でもよい。

取り組む読み物は、英語学習者向けに編集された“Cambridge English Readers,”“Oxford Bookworms,”“Heinemann Guided Readers”などのシリーズから適当と思われるものを40点ほど選び出して、“Freshman English Readers”と名付けたライブラリーを作った。01年度からは、３bのキットにある“The Literature Strand”から選んだ10点ほどを加えてみた。冬休みに入る前の４回の授業において、各自で余った時間を利用してライブラリーに目を通して、興味のある読み物を探すように指示した。用意された読み物以外に自分が読みたいと思う本があれば、それを課題図書にしてもよいことにしたが、実際には希望する学生はいなかった。

６．学生たちの反応

各年度の最後の授業にて、以上のような多読の授業を従来タイプの読解の授業と比較した主な特色を学生たちに説明してから、アンケートを実施してみた。［資料４］にその内容と３年間の結果を示してある。この結果をながめてみると、SRA教材の難易度について（問２の２）01年度の学生が「ふつう」と答えている割合が多めであることを除いて、年度による違いはほとんど見られない。

SRAを用いた授業について「（とても）よかった」（問１）と回答した学生の割合が、全体で96.3%となり、高い支持率を示している。また、SRAの教材について（問２）、「（とても）面白かった」65.1%、「（とても）難しかった」57.6%、「（とても）ためになった」71.3%となっており、「難しいと感じながらも、面白く取り組めて、ためになった」という平均像が描ける。

新しい方式が「（とても）よかった」と判断した理由（問１）を見てみると、「自分のレベルに合った教材で取り組めたから」「各自のペースで学習できるから」「予習がなくて楽だったので」「いろいろな話が読めてよかった」「辞書に頼らなくなった」「英文レベルでの理解ができるようになった」「本物の英語力が身についたと思う」などに整理できる。代表的な意見を紹介しておこう。末尾のかっこ内は履修年度を示す。

・教材が自分のレベルに合ったものであったし、予習があると、ついつい分からない単語があると辞典で調べがちであるので、授業中であると分からない単語も前後から推測して読んでいこうとする意思が働くから。［00年度］

・各自のレベルに合った教材だから、簡単すぎて手応えがないということも、難しすぎてやる気

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

がなくなるということもなくてよかった。毎回、物語っぽいのとか、理系の話とか、違った話を読むのも、いろんなジャンルの英文を読むのに役立つと思う。[00年度]

・レベルがみんな同じでないのは当り前だから、自分に合ったものがやれるのはいいと思う。細かい所にこだわりすぎたり、不自然な訳がないのもいいです。[01年度]

・自分で好きなペースでやれるから意欲が出る。みんなと同じペースだと、どうしても無理が出るし、「やらされている」という感じがする。[00年度]

・予習を前提とする授業は、予習をしてこないと授業がなりたたないため、私にとって苦痛でした。また、別に面白いと感じない文章を読まされ、英語を身につけるというよりは強制的という感じがぬぐえません。ですが、この授業は自由な感じがしましたし、好きな話が読めますし、英語の課題をやらされたのも新鮮で、よかったです。すごく課題はてこずりましたけれど...。[02年度]

・英文１文１文を細かく日本語にすることを考えずに読めるので、日本語で理解するというより、英語のまま頭に入ることが多くなった気がする。自分のレベルに合った教材も、とても良かった。[00年度]

・高校の頃は単語１つ１つにこだわりすぎて、なかなか話が進まなかったが、この授業を受けて、ある程度のスピードで英文を読めるようになったから。[02年度]

「英文を素早く読み取る力を養成するという目標に、どの程度近づいたと思いますか」（問３）に対する記述を整理してみると、「目標に近づいた」と判断している学生が65名（81.3%）、「変化ない」と考えている学生が11名（13.8%）であった。残りの４名（5.0%）は、「読む力と単語力が落ちた」「素早くという以前の問題」「あまり意識していない」「大学入試の時がピークだった」などと自己評価している。

「目標に近づいた」と判断した理由としては、「読むスピード力がついた」「わからない単語や表現を気にしなくなった」「概要／あらすじをつかめるようになった」「日本語を意識しなくなった」などが目だった。

また、「英語リフレッシュⅡ」の授業全体についての感想（問５）の中に、下の学生のように、授業の冒頭で行ったリスニングに対する印象がよかったという記述が多く見られた。

・リスニングのストーリーが大変面白かったです。推理小説で、読み手の方たちもとてもうまくて、ワクワクしながら聞くことができました。「英語だよ！」という苦手意識がなくなりました。英語も言葉なのだと実感できました。授業もとてもよかったです。[02年度]

さて、問１で、従来のやり方と「かわらない」と答えた３人の学生は、その理由をつぎのように述べている。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

・個人のペースでやれるのはいいけど、みんなでひとつをやるのもいいから。[01年度]
・時間内に終わらせようとしてあせってしまい、斜め読みやカンで答えるってことを何度かしてしまったので、結局は、従来のやり方と理解度は同程度だったから。[02年度]
・問題を終わって話がわからないと、わからないままだから。[02年度]

最初の意見は個別学習そのものに否定的なものであるが、あとの２人は、理解が不十分な場合の問題点を指摘している。これと同様な指摘が、「今後改善するとしたらどんなことが考えられますか」（問４）と意見を求めた回答の中にも散見された。例えば、以下のような指摘である。

・最後まで読んでみて、やっぱり分からなくて気になったところや、問題でまちがえたところは、（調べたりして）分かるまで考えてみたい。[00年度]
・英文を読んでいてわからない単語もでてくるけれど、後でそれを復習する機会がほしい。英文を返却してしまうともう忘れてしまって、次回同じ単語でまた苦しむことになるので。[00年度]
・わからないことを読みとばして、後で辞書をひくのが面倒でほったらかしにしてしまうことがあった。きちんとやらないのが悪いとは思うけど、復習させるような方法を付け加えると良いと思う。[02年度]
・素早くさっと読んだ後、わからなかった所はやっぱり復習した方が良いんじゃないかと思う。授業中はその時間がないので、いちおうメモを取ったりしたが、結局そのままになってしまったので...。[02年度]

その他、改善点として、「教材に書き込めるようにしてほしい」「和訳がほしい」「最後の課題に工夫を」「バロック音楽がかえって気になった」などの指摘があった。それ以外の意見からいくつか紹介しておく。

・手を抜こうと思えばいくらでも抜くことができてしまうし、答えあわせの見直しの時間もあまりないので、Power Builderの時間を最長30分とか、決めた方がいい。[00年度]
・もう少し答えが詳しかったら、どんな間違いをしたのかがすぐわかっていいと思う。[00年度]
・教材の内容が、もう少し面白いものが多いといいなと思った。国語といっしょで、説明文っぽいのはあまり楽しくない。[02年度]
・時間が中途半端に余るときがあること。[02年度]
・毎回同じことを繰り返していたので、力はのびているのかもしれないが、飽きてくるのも事実。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

［02年度］

・ランクを上げたり下げたりする回数がもうちょっと増えたら、もっと上を目指そうとして意欲がわくかな...と思う。［02年度］

・「レベルを下げられた」ということがすぐにわかると、意欲が低下しました。でもこれは人それぞれであり、逆にがんばろうという人もいるかもしれませんが、私はとても悲しかったです。嫌でした。［02年度］

SRAは、そもそも、個人差に対応するために難易度の異なる教材を用意している点に最大の特色があった。「英語リフレッシュⅡ」の授業を設計するにあたり、この特色を生かして「英文を素早く読み取る力」を養成することと、それを応用して原書を１冊読破することをねらった。以上のアンケート結果から、初期の目的がほぼ達成されたと判断できる。

改善点や要望として「教材に書き込みたい」「和訳がほしい」「詳しい答えがほしい」「面白い内容の教材を多く」「飽きてくる」などの意見が寄せられたが、SRAの教材を使う場合には、残念ながら対処できない。一方、「わからなかった箇所を復習したい」「時間が中途半端に余ることがある」「レベルの変更を工夫してほしい」というような声に対しては、何らかの対応策を考えなくてはならないだろう。その点、「Power Builderの時間を最長30分に決める」という提案には魅力がある。個人差に対応するという原則に反するものの、ある程度の時間制限を設ければ、不明な箇所や間違えた問題の学習に時間をさくことができるし、中途半端に時間が余るということも防げるかもしれないので、検討してみたい。

８．結びにかえて

学生たちは、SRAを用いたような個別学習の授業を、中学や高校ではあまり体験していないと思われる。１人の教師のもとで大勢の生徒が学習する一斉授業を受けるなかで、ともすると受け身になりがちな学習スタイルに慣れてしまった者にとって、各自のレベルにしたがって教材を選び、自分のペースで学習を進め、それを自分で記録するという学習形態が、はたしてうまく機能するかどうか、不安であった。いざ始めてみると、これが取り越し苦労であったことがすぐに判明した。それはアンケートの結果からも明らかである。

SRAを利用した多読の授業を始めて４年目を迎えているが、学生たちが新しい学習体験を味わいながら、英語レベルでの理解を素早く行える読解力が身につくよう、個々の学生にきめ細かく対応した授業を実現したいと願っている。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

［資料１］“SRA Reading Laboratory”を用いた学習要領

［１］“Rate Builder”の学習

1　“Student Record Book”と“Rate Builder Key Booklet”をもらい、自分のカラーの“Rate Builder”を２枚選ぶ。“Student Record Book”表紙の一覧表の該当箇所（番号のマス）に斜線を入れる。

2　“Rate Builder Record Page”を開き、Number, Color欄に記入する。

3　「始め」の合図で、１枚目の“Rate Builder”に取り組む。

4　「つぎ」の合図で１枚目を終え、２枚目の“Rate Builder”に取り組む。

5　「やめ」の合図で解答を終え、“Rate Builder Key Booklet”の該当箇所を見て自己採点する。

6　採点の結果を“Rate Builder Record Page”に記録し、正答率を記入する。

7　“Rate Builder Progress Chart”（最終ページ）を開き、表とグラフを作成する。

8　表紙の一覧表の該当箇所に斜線をもう一本入れる（→Ｘとなる）。

［２］“Power Builder”の学習

1　“Rate Builder Key Booklet”と“Rate Builder”を返し、自分のカラーの“Power Builder”を１枚選んで、“Student Record Book”表紙の該当箇所に斜線を入れる。（前回途中で終わった“Power Builder”がある場合は、それをもう一度選ぶこと）

2　“Power Builder Record Page”を開き、Number, Color, Date欄に記入する。

3　開始時刻を記入してから、読み始める。（“Learn About Words”のＣ，Ｄ，Ｅの問題はやらなくてよい→問題のＡとＢのみやる）

4　“Learn About Words”のＢまで解答したら、“Power Builder Record Page”に終了時刻を記入し、所要時間を計算しておく。

5　取り組んだ“Power Builder”と同じカラー／番号の“Key Card”で自己採点する。

6　採点の結果を“Power Builder Record Page”に記録し、正答率を記入する。

7　“Power Builder Progress Chart”（表紙裏）を開き、表とグラフを作成する。

8　表紙の一覧表の該当箇所に斜線を加えてＸとし、終了したことを記す。

9　辞書で単語や語句を調べながら、間違えた問題をやり直す。

10　“Power Builder”と“Key Card”を返す。時間があれば、２枚目の“Power Builder”を同じ要領で学習する。

［３］整理

1　授業時間が終わりに近づいたら、適当なところで学習をやめる。

2　“Power Builder”などを返却し、“Student Record Book”を提出する。

［４］注意

1　“Rate Builder”や“Power Builder”など、皆で使用するものについては、書き込みを禁止します。ていねいに扱ってください。

2　質問があれば、遠慮しないでたずねてください。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

［資料２］“Power Builder”の解答用紙：実例

POWER BUILDER RECORD PAGE

POWER BUILDER NUMBER 10

POWER BUILDER COLOR Rose

DATE 11/29

HOW WELL DID YOU READ?

POSSIBLE RIGHTS 7

NUMBER RIGHT 6

PERCENTAGE RIGHT 86

LEARN ABOUT WORDS

POSSIBLE RIGHTS 11

NUMBER RIGHT 9

PERCENTAGE RIGHT 82

READING TIME

	HOUR	MINUTES
FINISHING TIME	14	15
STARTING TIME	13 :	38
READING TIME		37

COMPREHENSION TIME

	HOUR	MINUTES
FINISHING TIME		
STARTING TIME		
COMPREHENSION TIME		

HOW WELL DID YOU READ?

1 A 2 A 3 B 4 B 5 B C 6 A 7 C 8 9 10

LEARN ABOUT WORDS

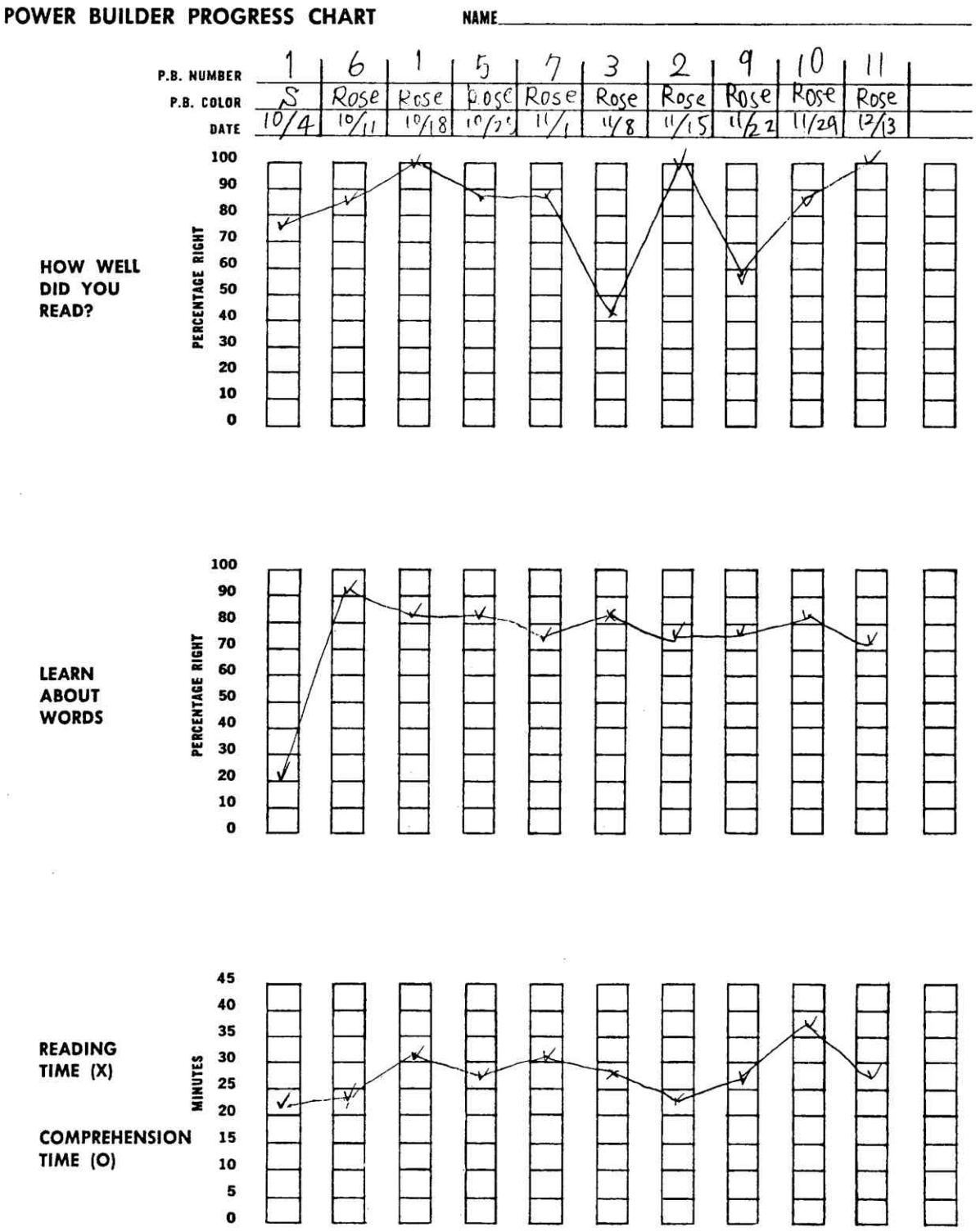
1 excavate
2 clashed precaution
3 procedures
4 frayed
5 pondered
6 writhing
7 C A spring 泉, 水源地
8 B
9 B
10 C
11 A
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

SKILLS TO WORK ON

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

［資料３］“Power Builder”のグラフ：実例



NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

［資料４］アンケートの内容と結果

後期の授業では、英文を素早く読み取る力を養成することを目的として、大学における平均的な「講読」の授業とは違った、新しい試みをしてみました。大きな違いをまとめてみると、次のようになります。

従来のやり方	→	新しい方式
・予習が前提となる		・授業中に取り組む／課題がある
・辞書、参考書などを用いた和訳作業		・素早く、正確に読み取るための訓練とその応用
・全員が同じ教材／テキストに取り組む		・各自のレベルに合った教材、気に入った読み物に取り組む
・全員一緒に１文１文を分析、解釈する		・各自のペースで、あらすじをたどり、物語を鑑賞する
・進み方が遅く、テキストの途中で終わりがち		・まとまった話を数多く読み終える
・文法、和訳を中心とした筆記試験		・あらすじ（英文）と感想文（日本語）のレポート

今後の参考にしたいと思いますから、ありのままを答えて下さい。（記号を○で囲み、理由・意見をたくさん書いて下さい）

１．新しい方式は従来のやり方と比較して、

	2000年度	01年度	02年度	合　計（%）
ア　とてもよかった	6人	6人	5人	17人（21.3%）
イ　よかった	20	20	20	60　(75.0)
ウ　かわらない	0	1	2	3　(3.8)
エ　悪かった	0	0	0	0　(0.0)
オ　ずっと悪かった	0	0	0	0　(0.0)

※それはなぜですか？

２．授業中に取り組んだ“SRA”の教材はどうでしたか？

	2000年度	01年度	02年度	合　計（%）
（1）ア　とても面白かった	4人	0人	1人	5人（ 6.3%）
イ　面白かった	13	18	16	47　(58.8)
ウ　ふつう	9	8	10	27　(33.8)
エ　つまらなかった	0	1	0	1　(1.3)
オ　とてもつまらなかった	0	0	0	0　(0.0)
（2）ア　とても難しかった	2人	1人	0人	3人（ 3.8%）
イ　難しかった	16	10	17	43　(53.8)
ウ　ふつう	8	14	9	31　(38.8)
エ　やさしかった	0	2	1	3　(3.8)
オ　とてもやさしかった	0	0	0	0　(0.0)
（3）ア　とてもためになった	3人	3人	4人	10人（12.5%）
イ　ためになった	18	15	14	47　(58.8)
ウ　わからない	5	9	7	21　(26.3)
エ　あまりためにならなかった	0	0	2	2　(2.5)
オ　ほとんどためにならなかった	0	0	0	0　(0.0)

３．「英文を素早く読み取る力を養成する」という目標に、どの程度近づいたと思いますか。英文を読む際の自分自身の変化について、気づいたことを書いて下さい。

４．今後改善するとしたらどんなことが考えられますか、あなたの意見を述べて下さい。

５．その他「英語リフレッシュⅡ」の授業に関する意見や感想など、どんなことでもいいですから書いて下さい。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

［注］

（1）宮田　学　「新しい『英語』カリキュラムの展開－ライティング分野における誤文指導－」（名古屋市立大学人文社会学部研究紀要第４号、1998年３月）

宮田　学　「新しい『英語』カリキュラムの展開（２）－教養英語の完成に向けて－」（同紀要第７号、1999年11月）

（2）宮田　学編　『ここまで通じる日本人英語－新しいライティングのすすめ』（大修館書店、2002年10月）

（3）“Moon of India”は“East・West 1”（Oxford University Press, 1988）に収められているリスニング教材、“Missing Person”はLongman社発行（1983年）のリスニング教材、“New York Detective Story”はＤＨＣ社発行『映画英語のリスニング』（1998年）の音声教材である。

NII-Electronic Library Service